若い夫婦がベッドの中で話すこと

高橋熱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若い夫婦がベッドの中で話すこと

【Nコード】

N5233U

【作者名】

高橋熱

【あらすじ】

初めて子供を実家に預けてきた若い夫婦。仕事と家事に追われ、会話の少なかった二人にとっての貴重な夜。突然夫が夜景見物に行こう、と妻をドライブに誘う。しぶしぶ同意する妻。しかしその先に待ち受けていたものは……。善から悪へ。幸福から不幸へ。ありきたりな日常の中で、ある瞬間を境に、すつと忍び込む不吉な予感。そんな雰囲気会話を中心に書いてみました。

喉の湯きは、安い焼酎を何杯も飲んだせいだけではなさそうだった。

「何度に設定したの？」

佳子は、掛け布団の外に放り出した足をぶらぶらと揺すりながら仰向けに伸びている夫に言う。

「二十七度だったかな、たぶん」

春人は天井の黒い染みの数を漠然と数えながら、そう答える。

「二十四度以上にはしないでって言ったじゃない。ちょっと効き過ぎるのよ、このエアコン」

「今動いたからだよ」

「外は氷点下よ。こんな汗ありえない」

「汗より喉渴かない？ 佳子は新陳代謝が盛んなんだね」

「普通よ。春人が汗、出なさ過ぎなのよ」

「あそこにもたくさん汗かくしね」

春人はにやりと笑う。

「あそこ？」

「そう。あそこ」

「何言ってるの、馬鹿」

佳子の顔が照れ臭そうに布団に沈む。絡められた指はより強固に繋ぎ直され、お互いの掌の汗を共有する。

「ごめん、セクハラ発言。そんなところにもぐったら、もっと汗噴き出しちゃうよ。麦茶、冷やしてある？」

「ごめん、さつき入れたばかりだからまだ温いわよ、きつと。少し飲み過ぎなんじゃない？ ボトル空いてたわよ」

「都会の生活はただでさえ喉が渴くんだよ。ごめん、もうだめ。限界。佳子はどうする？ 何か飲む？」

「私は大丈夫。それよりタオル持ってきて。暖房も一旦止めて」
電気もつけず、春人は裸のまま台所に立つ。深夜の静寂の中で、思ったより耳障りな冷蔵庫の通電音に辟易しながら口から零れる生温い液体を拭う。

寝室以外は、まるで犬のいない犬小屋のように冷えている。台所と寝室の温度差に体の震えが止まらない。部屋に戻る途中、一度トイレに寄る。カレンダーには、二月十日に生理の始まりを表す星印。そうになると、排卵予想は二十五日。

二十五日は夜会議が組み込まれているんだっけ。

春人は一度大きな溜め息をつき「次の子は間違はなく女の子じゃなきゃだめだ」と、その顔と名前をぼんやり想像する。

「この部屋以外、みんな凍ってる」

逃げ込むようにドアを閉めて、春人はベッドサイドに腰掛ける。

「今年は特に寒いわね。この時期まで雪が降らないのは不思議だけど。ねえ、タオルは？」

「あ、ごめん、忘れた」

タオルのことはすっかり頭から消えていた。物忘れがひどい、と最近自身でも思う。特に妻からの頼まれごとがどうにも卒なくこなせない。

「うん、でもいい。暖房止めたら、ちょうどよくなってきた。それよりさ、海斗、大丈夫かな」と佳子は呟く。

「もう、とつくに眠ってるよ」

「迷惑じゃなかったのかしら」

「迷惑なんてことあるわけないよ。孫を可愛がることしか楽しみがないんだから」

「そんな言い方は失礼よ。でも初めてのお泊まりだし」

「きつと、遊び疲れてぐっすりだよ」

「気を使って連絡してこないだけなのかもしれないじゃない？」

「そんな親じゃないって」

「海斗のこと、気にならないの？」

「もちろん気になるよ」

「本当に？」

「うん」

佳子は時々、こうして春人に自分や子供への愛情を確かめる。妻子への愛情は十分足りていると思うか、と問われて、『十分足りている』と自信を持って答えられる男はどのくらいいるのだろうか、と春人は思う。

「ごめんね。初めてのことだから。海斗がいない一夜を送るの」

「やっぱり連れて帰ってくるべきだったかなあ。でも海斗も泊まりたがってたし、そろそろそういう経験もいいかなと思ったからさ」

こんな想像はよくないと思いつつ、妻子どちらに先立たれる方がより辛いか、と問われれば、それは春人にとっては間違いなく「佳子」だった。子供が生まれ共有した時間は、大学時代に佳子と出会い、これまでに共有してきた時間に比べたらはるかに小さかった。

「お母さんのこと大好きだからね。でも、いくら本人が泊まりたいって言ってもその時だけなのよ。眠る時は私がいないと駄目なんだから」

「たまには佳子とゆっくりしたいと思ったし、佳子もそれを望んでいるのかと思ってた」

「もちろんそういう気持ちじゃなかったわけじゃないわよ？ 夜泣きの一番酷い時は、もしこの子さえいなかったら、と正直思ったこともあった。でも、これまでずっと一緒だったでしょ、産まれてからずっと。海斗のいない夜が、こんなに静かで寂しいものだなんて思わなかった」

「いないって言ったって、同じ市内にはいるんだから。いつかはそういう日が来るんだし。みんな平気で実家に預けてるって言うてるよ」

「平気で預けてるわけじゃないわよ。どうしても見てももらわなければいけない用事があるんでしょ。夫婦が遊ぶために子供を見てもらうのなんて、私は嫌。気が引ける」

他所で赤ん坊が泣いている。泣き声が聞こえると、海斗ではないかと一瞬どきつとする。子供の泣き声には二人とも条件反射的に反応してしまふ。

「でも私は恵まれてる。実家は近いし、春人も早く帰ってきてくれるし。あとはお給料がもう少しよかつたら言うことないけど」

給料の話は、春人にとって冬の寒さ以上に身に伝わる。どれほど心の中で「幸福だ」と叫んでみても、『あなたの給料はこれだけ』と括弧つきで言われると、胸を張り顔をあげることに激しいためらいを覚える。まるで、服を着ないで街を歩かされているような感じだ。

「給料が安い代わりに、こうして育児にも参加できるし、休みも多くとれる。たくさんお金を稼ぐには、それ相応の時間と家庭を犠牲にしなきゃいけないと思うよ」と春人は負け惜しみを言ってみる。

「そうかもしれないわね。ごめん。分かっていながら、つい。ねえ、布団に入ったら？」

春人自身、裸のまままで話していたことをすっかり忘れていた。

「パンツをどこに脱いだのかな、と思って」

「この足元にあるのが、そう？」

「どれどれ」

掛け布団の端から手を忍ばせて、佳子の足元をまさぐる。

「ん、やめてよ、くすぐりたい」

「ちよつと手が触れただけだよ」

「油断も隙もない」

「楽しいね」

「馬鹿みたい」

そう言いながらも、佳子の顔は大きく弛んでいる。

「あのさ」と春人。

「ん？」

「佳子は今、幸せ？」

「何よ、いきなり」

佳子は春人の質問の真意を探るように目をじっとみつめながら、もちろん幸せよ、と少し照れながら言う。

「幸せだよ、俺たち」

「どうしたのよ」

「給料安いけど、幸せだよね？」

春人の目は真剣だ。けれども佳子には、春人の瞳がちよつとだけ潤んでいるようにも見えた。

「もちろんよ。海斗も健康で元気に育ってくれているし。毎日、とても幸せよ。怖いくらい」

腕枕の中に、佳子の顔。鼻から漏れる規則正しい呼吸。金束子のように混線する髪。

妻と二人きりでベッドにいる時間というものが、春人にとってはこの上なく貴重なことのように感じる。

引き伸ばされた家族の写真。枕元のフォトフレーム。春人と佳子二人を描いたクレヨン画。図書館で借りてきた林明子の絵本。寝室は、たくさんの子供の思い出で満たされている。

もし佳子だったら、と春人は考える。先立つとすれば自分と海斗、どちらがより辛いと言っのだろう。

もちろん、両方に決まってるでしょ。

恐らくそうであるだろうし、またそうであってほしい、と思う。

「結局、その仕事を選択しているのは自分なんだよね」

春人の気分はまだいくらか高揚している。

「田野倉って覚えてる？ 結婚式にも呼んだ。そいつがさ、公認会計士の資格取って独立したらいいんだ」

「公認会計士？ すごいじゃない」

「あいつが、って感じだよ。デスクワークには絶対向いてないタイプだと思ってた。将来は間違いなく自衛隊だろうとみんなで言ってたくらいなんだから」

彼を一目見れば誰でもそう思うよ、と春人は付け足す。

「人をみかけて判断しちゃだめよ。でも、会計士かあ」と佳子は感心したように言う。でも佳子がどれだけ会計士の仕事について知っているのだろうか、と春人は思う。

人を羨む話は、春人は嫌いだ。してみたところで、何一ついい気持ちになることはない。今日は予測しないようなことをよくしゃべる。安いアルコールを中途半端に飲むのは却って毒だ。

「人のことより、私たちのことをもつと考えないとね」

と、タイミング良く佳子の方から話題転換を持ちかける。私たちのこと、と言っても、思考の大半を占有しているのは海斗なんだろうな、と春人は思う。

「海斗もこれからどんどん大きくなっていくしね」と、すかさず佳子。全く、凶星。

「俺のことは？」

「え？」

「いや」

もう一度言葉を繰り返すほどのことではないと、春人はそのまま受け流す。

「ねえ、気がついてない？」

「何を？」

「この間ね、お風呂入る時に」

「痩せたってこと？」

「痩せた？ 誰が？」

「俺」

「痩せたの？」
「毎朝、腹筋とスクワットしてるんだよ。少し腹回りが絞れたなって思わない？」
「そうなの？ 分からなかった」
「もう2キロは減ったよ。まだ始めてそれほど経ってないのに。って、俺の話じゃない？」
「うん、海斗のこと」

話の中心を我が身に置こうとする春人の試みは悉く失敗に終わる。
「右目の眉がうつすら白くなっていて、白髪みたいに色が抜けてるのよ」

「ハタケ？」

「うん、私もそう思っただけでしばらく様子を見ていたんだけど、最近その範囲が広がってきてる気がするの」

「病院は？」

「まだ行ってない。市販の塗り薬は全然効果ないみたい」

「ハタケなんて、放っておけば治ったけどね、昔は」

「ねえ、ハタケって、もつと肌が乾燥したようにかさつくでしょう？ そういう感じではないの。普通の肌と同じで色だけ抜けてるって感じ。ハタケで眉毛が白髪になんてなる？」

「さあ、分からないな」

眉毛の白い海斗の顔が、春人にはうまくイメージできない。

「明日、皮膚科に行ってこようかと思って」

「そうだね。素人判断が一番危険だよ。皮膚病って、内臓疾患のサインでもあるっていうし」

「脅かさないでよ」佳子は顔を大きく歪める。

「明日は日曜日で病院もお休みだから、月曜日につれていく。内臓疾患なんてことじゃなければいいけれど」

「ごめん」

「何？」

「ちょっと、腕が痺れてきた」

「ん」

「はずしてもいい？ 腕」

「うん。普段しないことするからよ」

「腕枕くらい、いつもしてるよ」

「まれに、でしょ」

「そんなことないって」

「それにしても、春人は健康よね」

「それは、何とかは風邪ひかない、って言いたい？」

「そういうことじゃないけれど、羨ましい」

「佳子だって、風邪ひかないじゃないか」

「うん、風邪はひかないけどね」

「けど？」

「ううん、何でもない」

しばしの静寂。「ぱちん」と軋む洋筆筭。芳香剤の香り。絡み合う大腿の温もり。

経済面での不満は残るが、それさえ抜きにすれば、今以上の幸福はない。海斗の小さな皮膚病が、とても重大な一家の危機に思えるくらい、これまでトラブルもなく順調だった。これからもずっとそうであってほしい、と春人は願う。

「ねえ、今の音、何？」

「音？」

「瓶の割れるような。聞こえなかった？」

「聞こえなかったな。外？」

「もっと近い場所よ。うちのベランダから聞こえた気がする」

「ベランダ？」

二人はもう一度耳を澄ます。さすがにここまでは、冷蔵庫の音は

聞こえてはこない。

「ちよつと見てきてくれる？ 最近、夜に変な人がうるついでるらしいの。回覧で戸締りに注意するようにつて。空き巣も増えてるみたいだし」

「物騒だね。でもそんな音聞こえなかつたよ？ 大丈夫だよ」

「根拠のない『大丈夫』ね。いいわよ、私が行くから」

「分かつたよ。見てくるよ」

引き止めてくれることを期待しながら、春人はわざとゆっくり体を寝返らせる。

「カーテン開けたら、ベランダに刃物を持った男が立ってたらどうする？」

春人の頭に、どこかのドラマで見たようなその光景がありありと浮かび上がる。

「脅かすなつてば」

「怖いんですよ」

「子供じゃないんだから」

いい年をして我ながら情けない、と春人。「最愛の家族」だなんていくら格好つけたこと言っても、こんなことでは、実際にそういう場面に遭遇した時、危険を省みず妻子を守り抜くことなんてできるのかどうか甚だ怪しい。

「海斗の方がよっぽど度胸あるわね。夜にだって、一人でおトイレ行けるようになったんだから」

「そつえばさ、さつき、何か言いかけたの、何だった？」

「話をすり替えようとしてるでしょ」

「何でもないつて何？ 気になるよ」

「ベランダ見てきてくれたら、教えてあげる」と言つて、佳子はほくそ笑む。

「やっぱりそこなのか」

「冗談よ。気のせいだったかもしれない。鍵は間違いないかかけたか

ら

「で？」

「うん。あのね、ここ、触ってみてくれる？」

佳子はごつごつした春人の手を自分の右の胸に導く。

「いや、もう少しこつち。ここ、強く押してみて」

「うん。それが何？」

「何かあるの、分かる？」

「うん、分かる。何これ」

指の間に、捕らえどころのないビー玉のような塊りがごりごり動く。

「しこり」

息を深く溜めてから、佳子は静かに言う。

「しこりって、まさか」

「まさかって、何だと思ってるの？」

春人は口に出していいものかどうか悩む。

「まさか、ガン、だなんて思ったんじゃないでしょうね？」

まさか思ったままの言葉が出てくるとは思ってもみなかったので、春人はベランダで刃物男と鉢合わせするくらい、どきっとする。

「うん。医者に行ったの？」

「ううん」

「どうして？ こんなに大きな塊り、普通じゃないよ」

「しこりがあるからって、何でも『がん』だってわけじゃないのよ。乳腺炎。ほら、私よく母乳、海斗にあげてる頃なつたでしょ？ それからもしこりができるっていうから。ただ最近、ちょっと大きくなってきたような気がするから」

「どうしてそんな大事なことを教えてくれなかったの？」

「話そうと思ったって、いつもお酒飲んで先に寝てる。こつこつ話はデリケートなものでしょ？」

「愛してる」という割りに酒と睡魔に勝てない自分が、春人は実に情けなく思う。

「家事や育児で私も追われてたから、なかなか言い出せなくて。医者に診てもらってから話そうと思ってたの」

「もし佳子に何かあったら、俺と海斗はきつと途方にくれる」

「私がいなくても、あなたならやっていけるわよ」

「佳子がいなかったら、何もできないよ。料理も作れないし、掃除も洗濯も。ましてや、海斗を俺だけで育てていくなんて」

「それだけ？」

佳子の声は少し寂しげだ。春人はもう一度自分の発言を反芻し、補うべき言葉を探す。

「それは家政婦さんを雇えばできることよ。実家に協力してもらってもいいんだし。あなたのお母さんの方が、ずっと海斗のこと上手に育ててもらえそう。私の代わりなんて、他にいくらでもいるわ」

「何言ってるんだよ。海斗には、佳子がいなくちゃだめだよ。佳子がいなくなるなんてこと、考えたくもない」

「本当？」

鋭い疑いの視線を、春人は感じる。いい話の流れではない。

「佳子とずっと一緒にいたいと思っただから結婚したんじゃないか」

「私のこと、本当に好き？」佳子は真顔でそう春人に聞く。

「好きだよ、もちろん」

「最近、そういう言葉、全然聞いてなかったから。ちょっと意地悪してみた」

しばらくぶりに、佳子は笑みをこぼす。

「海斗が産まれてからはずっと子供のことだで精一杯だったもんね。付き合っていた頃みたいに、コンサート行ったり、映画を観たり、食事に行ったりなんて、全然できなくなっちゃったから。大体、今日みたいに子供なしでこうして二人きりで夜を過ごすなんて、いつ以来だろう」

「そうね。思い出せない」

しばらくお互いに目を合わせるが、どちらも埒があかない感じなので、春人から言葉を繋げる。

「そういう意味では、今日ってすごく貴重なんだよね。貴重だっと思うと、何だか眠ってしまうのももったいなくて」

「いつもは、早い時間でもすぐ寝ちゃうのにな」と言って佳子は笑う。矛盾している、と春人も思う。

「そうは言ってももうこんな時間」

「いいじゃないか。明日は休みなんだし」

「今から何をするの？」

「それについて、考えてた」

今日だけは、どうしても眠ってはいけない日のような気がする。それに、いつもの睡魔にもどうにか襲われずに済んでいる。

春人は再び喉の渴きを覚えたが、今回は我慢することにした。佳子の側を離れてはいけないような気がした。

「あのさ」

「ん？」

「ちょっと出かけない？ 夜景が綺麗に見える公園があるんだ。二十分もかからないと思う」

「夜景って、もうじき三時よ？ それにこの寒さの中、外に出るなんて」

唐突な春人の提案に、佳子は面食らう。

「俺の人生って、これまでとても順調だった。佳子と結婚して、海斗が生まれて、そんなに裕福ではないけれど、健康で幸せに暮らしてる」

神秘的な春人の顔つきに、佳子はいつもとは違う何かを感じている。

「毎朝同じ時間に起きて、会社に行って仕事して、夜は皆で食事して、九時になったら子供と一緒に布団に入る。もちろん、それが嫌だっていう訳じゃない。もう少し自由に行動できたら、って思う」

だけ。ほら、若い頃なんてさ、徹夜でお酒飲んでカラオケしたり、ホテル巡りしたりいきなりその日に思い立って、デイズニーランド行ったりしたよね？」

「それは結婚前はね。でも今は海斗がいるし、独身時代のように自由気ままに、って訳にはいかない」

「うん、だからさ、今日はせつかく海斗もいないし、このまま寝てしまうのが惜しいんだよ。眠ってしまったらすぐに朝だし、春人を迎えに行けば、またいつもの日常に戻る訳でしょ？　こんな時くらい、夜中の三時に突然思い立って夜景を見に行く、なんてこともいいんじゃないかと」

佳子には春人が冗談で言っているようには思えない。それほど眠くもなかったので出かけること自体はやぶさかではないが、春人の酒がまだ残っているのではないか、ということが佳子には少し気がかりだった。

「お酒のことを心配しているのなら大丈夫。もうとつくに抜けてるよ。つまりね、佳子、俺はいつでも、そういう危険な場面は避けてきた。夜の行動は極力控える。トラブルの種がありそうなところは近づかない。順風満帆の人生、って結局、そういうところを避けているだけなんだって思ってたね」

「好き好んでトラブルのありそうなところへいく人なんていないわ」「それで万事オーケーなのか、ということがこのところとても気になってね。ローリスクにはローリターンしかない。そんな人生じゃつまらないな。時には、リスクを背負うことも必要なんじゃないかな。時には失敗するかもしれない。でも、そこから得るものはあるだろうし、うまくいけば、今までの自分たちの生活では経験できなかった新しい世界に出会えるかもしれないんだよ」

「私は平穏な生活で十分満足よ？　平穏な生活を維持するのって難しいことだと思う」

「今まではそう思ってた、俺だって。でもそればかりでは、味気な

い気がしてさ。いや、たかだか夜中に夜景を見に行くだけの話だよ。大したリスクでもない。でも、これまでの俺にとっては、決して選択することのない行動なんだ。ちょっとだけ、これまでのパターンをずらしてみたい。他の人にはどうってことのないことでも、俺にとっては途轍もなく勇氣のいる大胆な行動なんだ。この気持ち、分かってもらえるかなあ」

無茶なことを言っているかな、と春人も思う。いつになく饒舌なことも自覚している。しかし、心の昂ぶりをどうにも抑えられない。今送り出した血液が、猛烈な速さで体内を巡り、心房を突き破る勢いで呼び戻されている。裸のまま、すぐにでも飛び出していきたい気分だ。

「そんなに毎日つまらない？」

布団をかけ直しながら、佳子は聞く。こんな会話をするのは、佳子にとっても春人と付き合い始めた頃以来の、実に久しぶりのことだ。特に海斗が産まれてからは、夫婦の会話はほとんど海斗を介した話題ばかりとなっていた。

佳子も望んでいた訳ではないが、育児と家事で精一杯だったことは事実だ。未来のお互いの夢の話よりも、紙おむつを少しでも安く買えるドラッグストアを探すことの方が大切だった。

指の骨を鳴らすように、掛け時計が鳴っている。この瞬間まで、春人はこの部屋に掛け時計がある、ということをしつかり忘れていた。

海斗がいない、初めての夜。

午前中に迎えにいかなければならないことを考えると、残された時間は、あとわずかか。

「でも、今日は家にいた方がいいんじゃない？」

「遠いところに行く訳じゃない。何なら、俺一人で行ってもいい」
勢いとはいえ、「一人でも行く」と言った自分に、春人は正直驚いた。

「一人でなんて行かせられる訳ないじゃない。お酒は本当、大丈夫？」

「もちろん。あれだけ汗をかけばね」

「あなたはかいていないでしょ。いいわよ、分かった。支度するから、ちよつと時間頂戴」

「ごめんね。きつと素敵な夜景が見られると思うよ。ナビ、セットしてくる」

車の温度計はマイナス三度。運転席で吐く息は手で掬い取れるほどに白く、フロントガラスには無数の氷の結晶がボヘミアングラスの模様のように張り付く。

エンジンが温まるまではエアコンも役に立たず、当面、厚手のダウンジャケットを脱ぐ訳にはいかない。

バイパスと都道の狭間、「百草台住宅」から少し山を登りかけたところにある高台の公園。ここは最近、地域のコミュニティーサイトの書き込みを眺めていて見つけたところだ。

ナビで目的地を確認。道が途中で切れているが、その先に小さな公園と遊歩道、そして駐車場のマークがある。「P」のマークにカーソルを合わせ、セット完了。

小走りで助手席のドアを開ける佳子。「何も化粧してないけど」
「構わないよ。誰かに顔を合わせる訳じゃないから」

道が白く見えるのは、街灯のせいなのか、霜が降りているのか分からない。慢性的な渋滞で普段は数珠繋ぎの踏み切りもノンストップで通過する。真夜中に電車は動いていない、という当たり前のことに、春人は改めて驚く。新しい世界は、もうこんなところから始まっているのだ。

「昼間が嘘みたいだね」

まるで正月のオフィス街のように静かで、人の気配が感じられない。日中もこうだったらいいのに、と春人は思う。

「そんなにスピード出さないで。お酒飲んでるの、忘れないでよ？」
「もうすっかり覚めてるって言ったでしょ。水分もたくさんとってる」

佳子は心配性だ、照明の影に埋もれる佳子を、春人はちらと見る。
「八十キロも出てる」

「バイパスだからね」

「バイパスは高速道路じゃないわ。三十キロオーバーじゃない」

「こんなにバイパスが空いてるなんてめったにないから、つい。でも、五十キロで走ってたら逆に危険だから、七十までは勘弁して。」

「もらい事故ってこともあるし。法律を頑なに遵守したばかりに命を落とすなんて、本末転倒だよ」

「最近、理屈っぽいわ」

「年のせいかな」

「かもね」

佳子の顔に刻まれた細かい一つ一つの皺。苦勞ばかりをかけている自分の弱さ。日々目標もなく、ちょっと気の利いた小学生にでもできるような仕事を、ただ黙々と処理するだけの生活。佳子が期待していたのは、こんな自分だったのだろうか。夢を語り、夢を目指し、そしていつか夢を叶える、可能性に満ち溢れた、バイタリテイ漲る男の姿。その期待をいつまで裏切り続けているのだろうか。

そして、裏切りが一つ増えるたびに、佳子の皺も、また一つ刻まれる。

悲しいかまいたち。

「ねえ、赤」と佳子。

「ん？」

咄嗟に、春人はアクセルから脚を離す。

「今の信号」

「そうだった？」

「ちよつと、大丈夫？」

「大丈夫だよ」

「また、根拠のない『大丈夫』」

ハンドルを握ると、考え事をする機会が最近確かに多い。春人にとって、運転中に「運転に集中する」という行為は返って難しい。

「次の交差点で曲がるはずんだけど、ナビ、指示してないな」

「そうなの？」

「うん。次で曲がった方が近いはずなんだ」

「初めてのところだし、ナビ通りに進んだ方がいいんじゃない？」

「いや、ここはまだ知ってる道だから大丈夫。次で曲がるよ。間違つて曲がったとしても修正してくれる」

交差点を曲がり、生活道路へ入る。センターラインもない、狭くて暗い道。

海斗がいないのに童謡を黙って聞いていることもないよな、春人はCDの電源を落とし、暖房の風量レベルを一つ下げる。

「寂しいところね。こんな住宅地、いくら土地があつたって住みたくない」と佳子。同感、と春人も答える。人間の存在を全く感じさせないところだ。

不規則に点在するそれぞれの家の玄関の灯を頼りに、時速三十キロを保つたまま車を進める。

星も月明かりも視界から消えている。それは闇の深さが増したということより、空が厚い雪雲に覆われ始めたということだ。天気予報では、夜半から朝方にかけて雪が舞うかもしれない、と注意を促していた。

おぼろげな外灯を反射した道路の先に、何か白い塊りのようなも

のが見える。塊りには二つの目のような光が輝いていて、ヘッドライトにちかちかと反応している。このままいくと、衝突は避けられないように春人には思われた。

しかし、その塊りはいつまでも動く気配はない。今度はじっと運転席の方を見つめている。

春人はそのままアクセルを踏み続ける。春人は今、佳子の胸のしこりと海斗のハタケを同時に解決してくれる総合病院について正に考えているところだった。

早くどけよ。

わざわざそれを避けるためにハンドルを切り回しブレーキングすることが、今の春人にはとてもヘビーな仕事のように思えた。

どすん、という音と共に、一瞬何かに乗り上げるような振動が車内を揺らす。

「ちよつと、何？」

まどろみかけていた佳子は助手席で跳ね起きる。

「くそ」

春人は車を左に寄せ、ハザードランプを焚く。外がどれだけ冷えているのか分かっていたのでドアを開けたくなかったがこの状況では止むを得ない。

「何かぶつかつたの？」

「たぶん。ちよつと見てくるからここで待ってて」

ドアポケットの小さな懐中電灯を手に、春人は車を降りる。衝撃のおかげで、思い出しかけていた隣の病院の名前を頭文字から失念していることに腹立ちを覚えた。

馬鹿猫。

バンパーには衝撃ほどの目立ったダメージはないようだ。足回り

も特に問題ない。とりあえず、車が無傷であったことに内心ほつとする。これ以上、余計は出費はかけられない。バンパーは、この間佳子が狭い銀行の駐車場で柵にぶつけ、取り替えたばかりだったのだ。

白い塊りは、右側前輪の直ぐ真後ろにあつた。春人は恐る恐るその物体をライトで照らす。照らした瞬間、春人は後悔する。別に見なくても結末は分かっていたのだから。

茶色い革の首輪と大きな鈴をつけた白い猫の腹は真っ赤に染まり、びくりとも動かない。先ほどの鋭い眼光ではなく、真っ黒な瞳と口を半分だけ開けて春人と目を合わせる。頭を避けられただけ幸せだな。家に戻ったら、すぐにタイヤ洗わなくちゃ。

春人は佳子が心配そうに車内で待っていることを確認してから、もう一度バンパーを照らす。唾を飲み込もうと思つたが口の中が乾燥していて一滴も唾液が出ない。慌ててはいけない。夜景を見に來ただけなのだから。

「行こう」

春人は懐中電灯をポケットにしまい、サイドブレーキを解除する。冷静でいたい気持ちとは裏腹に、心臓が壊れそうなくらい激しく鼓動している。

「何だつたの？」

「馬鹿な奴がいるもんだね。道端にトースター捨てるなんて」

「トースター？ まあ」

「ごめん、気付くのが遅くって、避け切れなかった」

「車は大丈夫？ ねえ、帰りましょうよ」

「大丈夫だよ。ちよつと擦っただけだから。もう直ぐなんだ。雲行きも怪しくなってきたみたいだし、急ごう」

「ねえ、お願いだから、慌てないで」

「分かつてる」

車はナビに沿って更に住宅地からはずれた山道の傾斜を登る。照明も明らしい照明もなく、あるとすれば谷側の枯れ木の間から時々顔を覗かせる街の明かりくらいだ。乾いた落ち葉や小枝を踏むばちばちという音だけが、増幅されて二人の耳に届く。

ハンドルを握る春人の頭には、さつき懐中電灯を当てた瞬間の猫の顔がありありと浮かぶ。

春人は助手席を見る。佳子は両手を膝の上に乗せて、じつと外の景色を見ている。春人は佳子が今何を考えているのかを想像する。

胸のしこり。海斗のハタケ。そして、家族の幸せ。家族の未来。

「何を考えているの？」

春人は想像が正しいかどうかを確かめるように聞く。

佳子は視線を動かさず、呟く。「あなたのこと」

「俺のこと？」

「あなただけは、いつまでも健康でいてねってこと」

「みんなそうでなければ、困るよ」

「春人あつての家族だもんね。海斗が産まれてから、確かに海斗ばかりにかかりつきりで、なかなか春人の望みを聞いてあげられなかったから」

「そんなことないよ。子供にやきもち妬くなんで、どうしようもない親だよ」

「いつまでもみんな無事でありたい」

そう言っつて、佳子は視線を春人に向ける。春人は前方の暗闇に目を凝らしながら、その気配だけを感じている。

「リスクなんて背負わなくていい。裕福じゃなくてもいい。家族が皆健康で、幸せに暮らしていけさえすればいいの。それが今の私の夢」

佳子はそれ以上何も言わないし、春人も聞こうとしない。

真夜中の夜景見物。

自分で成し得る最初で最後のリスクテイクなのかもしれない。

車の両サイドには、もう窓に触れてしまっほど枝や葉が迫っている。

「ここが公園？」と佳子。

「設定がおかしかったのかな」

「どう考えても、ありえない」

「そつみただね」

道幅はないが、もう少し走れなくもない。ナビの地図では、確かに公園の敷地の中にいる。

「もどりましようよ」

「ユーターンといつても、切り返すスペースなんてなさそうだよ。

それとも、このまま進むと、いきなり開けたりするのかも」

「どう見ても迷ってるわ。本当に車でいけるようなところなの？

途中で止めて歩いていくとか」

「いや、そんなことはないよ。確かにこの先にパーキングがあるはずなんだ。でもほら、ここから駅ビルが見える。こうしてみると、随分高いところにいるんだよ。この辺りなのは間違いない」

「もう気が済んだでしょ。帰りましようよ。嫌だわ、こんなところ。怖い」

「このナビ、古いから直ぐに位置がずれるんだよ。もう一本こっちの道かもしれないね。ほら、ここに一本あるでしょ、道」

「ねえ、雪」

「本当だ」

天気予報なんて、都合の悪い時ばかりよく当たる。

「降ってきちゃったね」

「みただね。でも、粒が小さいよ。たいして積もりはしないって」

「何かすごく寒くなってきた。暖房強めてくれる？」

「あれ、ガソリンがない」

「え？」

「そういえば、ランプついてたんだ。入れようと思っ忘れてた」

「帰れるの？ 私たち」

「ランプついたって、数十キロは走れるから」

「だって、この前からついてたんでしょ？ 今だって二十キロ以上は走ってるんじゃない？ 自宅から」

「それ以上、走ってるかも」

「どうしてそんな暢気でいられるの、あなたって」

「とりあえず、エアコンは切っておいた方がよさそうだな」

「そんなことしたら、凍え死んじゃうわよ。こんなところで死にたくない」

「大げさだって。JAFがあるよ」

「この時間に？」

「そのために年会費払ってるんじゃないか。こういう時に来てくれなきゃ何のためのJAFだよ」

「ねえ、もう帰りたい」

「せっかくここまでできたんだから。エンジン止めてもいいかな。ちよつとだけ話したいんだ」

寿命を全うした犬が最後の息を引き取るように、二人を乗せた車は停止する。春人には、静かなところで言っておきたいことがあった。そうしないと、一生後悔するように思えた。

互いの呼吸音が聞こえるほど、周りは静かだ。雪の粒は春人の予想とは裏腹に少しずつ大きくなりながら、ガラスの余白を埋めていく。

若い夫婦はしばらく何も言わない。佳子はカーデイガンの袖をきつく握り締めながら、外に舞う雪の行く末をぼんやり眺めている。春人は奥歯の裏に忘れていたガムをティッシュに包んでシガレットケースにぐいと押し込む。

春人が一度だけ身震いをしたが佳子はそれに気がついていない。

掌には先の衝撃の余韻がまだかすかに残っている。

「さつき、トースターとぶつかって言ったでしょ」と春人は口を開く。「嘘。猫だったんだ」

「猫？」佳子は驚いたように、春人に目を向ける。

「猫はじつとそこにいたんだ。道のほぼ真ん中に。猫の目がじつとこっちを見ているのには気がついてた。でも、俺はブレーキを踏まなかった。確かに道幅は狭くて、ハンドルを切って逃げるなんてことは難しかったけれど、停止する時間は十分あった」

「どうして、嘘ついたの？」

「無理に避けようとしてさ、こっちが万が一、万が一の話だよ？

死んじやったとしたら、それは悲しいことだと思わない？小動物を避けようとして、人が命を落とすなんて馬鹿げてるよ。でも実際にスピードを出して走っている時に、それが原因で亡くなった人って、かなりの割合でいる気がする。処理上は『単独事故』って扱いでさ」

「それは違う話でしょ？ 十分避けることができたって言ったじゃない」

「俺はブレーキを踏まなかった。酔っていたからじゃない。ちゃんと自分の意志で踏まなかったんだ。今となっては、どうしてそんなことをしたのか自分でも分からない」

「今日のあなた、少しおかしいわよ」

「つまりさ、佳子がどれだけ俺のことを分かっているのか、ということだよ」

話が一度流れ出したら、春人にはもう止めることができなくなっていた。本当に伝えたいことはしかしさういうことではなく、もっと、これからの二人にとって大切なことであるはずだった。

「上手く言えないんだけど、故意に猫を轢くことがある、ということもひっくるめて、俺だっということ」

海斗を実家に置いてきたことは、やはり間違いだっただのかもしれない

ない。つい数時間前まで繋がっていた穏やかな日常生活がまるで遠い昔の記憶のように急速に色褪せていくのを、春人は感じる。顔の筋肉が、中途半端に固まった紙粘土のようだ。

「あなただつて」と、佳子は顔を上げずに言う。「私のこと、どれだけ知ってる？」

「佳子のことは、大体分かってるつもりだよ」

「ううん、きつと、分かってない」

「わかつてるよ。もう何年も付き合ってるんだから」

佳子の口調から、これから彼女が口にすることは非常にシリアスな問題を孕むことが春人には想像できた。春人はジューパンのポケットから新しいガムを出そうとしていたが止めた。

「私の男性経験、知ってる？」

「男性経験？ 昔聞いたのは、二人だった気がするけど」

「うん。私がそう言ったからね」

「違うの？」

「違う」

「何人なの？」

「いくら夫婦だつて、知らない方がいいこともあるのよ？」

春人の背中にぴりぴりしたものが走る。と同時に、交際を始めてからこの十数年間、これまで佳子の言葉を一度も疑ったことがなかったという自分が標準的な男なのかどうかについて春人は考えていた。佳子に疑われることはしよっちゅうだったが。

「知りたい」と春人は言う。言った直後に、「知らない」と言った方が良かったかな、と少し悔やむ。

「両手両足の数、足しても足りない」と、佳子はためらいもなく答える。

「ほら、聞かなきゃよかったでしょう」

「そうなんだ。でも佳子だつて女性なんだし、それなりに過去はあ

るだろうから」

どう返答するのがベターだったのか、春人に考える余裕はない。

「本当にそんな風に思える？」

「思ってるよ」

「あなたを含めて二人と言った女が、二十人以上経験してたのよ？ それであなたは何も感じない？」

「何も感じないって訳じゃない。驚いてるし、動揺してる」

「あまりそんな風には見えないけど」

変化に乏しい春人の表情を見ながら、佳子は猜疑の眼差しを向ける。正直、春人にはそれが一体自分にとってどういう意味を持つカミングアウトなのかを量りかねてる。現段階では、驚き、動揺する準備ができている、と言った方が正確かもしれない。

「病気だったの、私。躁鬱病って聞いたことある？」

「うん、何となく」

「性欲が抑えられない時があるのよ。後になって、どうしてそんなことをしたのか、自分でもよく分からない。朝起きたら、全く知らない男性が隣で寝ていた時もあったわ。幻滅する？」

「幻滅というより、佳子がそんな病気だったなんて」

「話してなかったからね。それに、病気はきちんと治療したから。もちろん、あなたと結婚してからは、あなただけだし」

「うん」

「うん、て、また本気？」

「佳子を疑ったことなんてないよ」

家事や子育てをそつなくこなすことが生きがいの彼女に浮気なんてしている時間はないだろうし、そもそも浮気願望なんて微塵もないはず、と春人は決め付けていた。

「そうなんだ。信頼されてるんだ、私」

「そりゃそうだよ。自分の妻を信じられなくてどうするの？」

「でもこの病気、再発するのよ、いつでも」

佳子はある重大な病気を告知された患者のように、これまでの声より一段低く言う。

「今は俺が見てるから」

「身近な人でも、結構気がつかない病なのよ」

「やけに脅かすね」

「あなたの性格じゃ分からないかもしれないわ。髪の毛を十センチも切ったのに気づかない人だから」

「もちろん気がついてるよ。いちいち言わないだけで」

「言わなければ、分かっているのと一緒になのよ。まあ、いいわ。

でももしまた病気になるっても、海斗を道連れにしたりするようになるとはしないから。逝く時は一人で逝きます」

「佳子が死ぬことなんて想像もしたくないよ。生きるとか死ぬとか、おかしな夜になったね」

「こういう夜を求めていたんじゃないの？」

「今となっては、それも怪しくなってきたよ」

「やっぱり、私の話なんて、聞かなかった方がよかつたんじゃない？」

「それはないよ。そういうことはちゃんと話してくれた方がいい。夫婦なんだから。胸のしこりのこともそう。何でも一人で抱えていてはよくないよ」

「話す機会なんてなかったじゃない。夜もすぐに寝ちゃうし」

「それはいつも反省してる。これから、酒を減らすよ」

「できる？」

「努力してみる」

「病院に行くの、本当は怖い。最近、悪い方ばかり考えちゃって」

佳子の寂しげな顔は、春人の胸とこめかみをひどく痛めた。まるで巨大な万力で締め付けられているようだった。

白い猫。二十人以上の男性経験。躁鬱病。胸のしこり。

とにかく今日はいろいろなことが一度にありすぎて、うまく整理をつけることができない。頭に浮かんだイメージを正確に言語化することができず、かといって特定の言葉のイメージを展開していくこともままならなかった。捕まえようとするとする言葉もイメージも、意識の狭間からするりと逃げてしまう。

脳天気な順調だなんて思っていたのは自分だけだったという訳だ。春人は俯く佳子の膝に手を当てた。

今日を境に、先の見えないトンネルの入り口に立つことになったことを、春人は自覚していた。その暗闇の向こう側にあるものは、恐らく「幸福」と対極に位置するものである気がしてならなかった。

「ねえ、それより、いい加減エアコン入れて。このままじゃ、寒くていられない」

二人の吐く息で、車内のガラスは曇り始めている。佳子は貧乏揺すりをするように、かたかたと膝を震わせる。

春人は諦めてキーを捻る。しかしセルの回転がやけに弱く、なかなかエンジンが始動しない。

バッテリー上がり？ 何度かチャレンジしてみるものの、最後はセルすら反応を止め、かちん、かちんという電子音だけがボンネットの奥から空しく響く。

「バッテリー、あがつちゃったのかな」

「ねえ、どうなるのよ、私達」

「しょうがない。マジでJAF呼ぶよ」

ジーンズのポケットから折りたたみ式の携帯を開き、春人はアンテナを立てる。

「どうしたの？」

「電波が入らないみたい。佳子の貸して」

「持ってきてないわ。春人が出掛けに慌てさせるから」
「困ったな」

山道と言っても、ここは東京。少し戻れば住宅地もある。それにしても、東京にいなから「圏外」とは。

「ねえ、凍死するって、冗談じゃなくなってきたかも」

「そんなことないよ。さっきの家があるあたりまで歩いたらどのくらいかな？」

「結構戻るわよ。本当に歩くの？」

「途中で電波入ると思うよ。それしか方法がない」

「嫌よ、こんな格好で」

「もちろん俺だけ行ってくるから、待ってて」

「俺だけって、こんな山の中で、しかもエアコンも効かない車の中で一人で待ってるってどういうの？ 怖い」

「じゃあ、どうすればいい？」

「わからないわよ私になんか。ねえ、こんなところで本当、死にたくない」

「猫を轢いたあたりからおかしくなったんだ」

春人は今にも泣き出したい気持ちで一杯だった。

「海斗に会いたい」と佳子。「ねえ、今すぐ会いたい。会って、あの子をぎゅって抱きしめてあげたい。もしかしたら、実家から連絡がきてるかもしれないわ。むずがって」

「俺も会いたいよ。たった数時間会っていないだけだけど」

「いつも側にいるからね。ん、あれは」

背後で赤い光が明滅しているのがサイドミラー越しに見える。それは音もなく、少しずつ大きくなって、こちらへ向かってきているようだ。

「パトカーよ！ ねえ、私たち、助かった」

佳子は丈の長いフリースのジャンパーをわし掴んでドアを開け、春人の制止も聞かず光に向かって勢いよく駆け出す。

春人はなぜかすぐに後を追う気にはなれなかった。闇の中でみるみる小さくなっていく女の背中、まるで全然知らない他の男の妻であるかのように思えた。

もう一度、春人は今回のこの選択が正しかったのかどうか検証しようとしてみたが、検証するにはまだ遣り残していることがあった。

ドライブの真の目的、 夜景見物。

春人は車を降り、運転席のドアを開けたまま、真っ暗な山道のさらに先に向かって進む。 少しずつ白さを増す地面の冷たさと顔面に降りかかる雪の粒が、容赦なく春人を襲う。手袋をしていない指先から、たちまちなげなしの熱としなやかさが失われていく。

少しずつ小走りになり、最後は全力疾走になる。途中で一度振り返ったが、パトカーや妻はもちろん、車の姿もとうに見えない。何度も躓きそうになりながら、また時々、道にせり出した小枝が振り上げる春人の手の甲に小さな痛みをもたらしたが、それでも彼は何かに取り憑かれたように走り続けた。

巨大な窪みを一つ飛び越えると、突然目の前の視界が開けた。砂利の敷地に数台の車が止まっているのが見える。そこだけ木々はぶつりと途切れ、タイヤの敷き詰められた半円形の展望台が、杯のよう空に迫り出している。

夜景。

春人は激しく息を切らしながら、誰もいないベンチに腰掛け、先ほど食べ損ねたガムを取り出す。眼前の景色は遮る物もなく、広い視野で見渡すことができたが、夜景を演出する街や家の灯りはほとんど消されている。

最初、自分が今どの方角を向いているのか分からなかったが、柵の隙間から覗く百貨店のロゴマークから、駅の位置を特定することだけはできた。

余りの寒さで顔がこわばり、ガムの味がよく分らない。それはクールミントにも思えるし、甘酸っぱいラズベリーのようにも思える。

リスク。そして、得たもの、失ったもの。

春人はしばらく天を見上げ、海斗の寝顔を思い浮かべる。その顔は今の海斗の顔ではなく、まだ一歳にも満たない頃の小さな彼だ。しかし海斗の顔はたちまちかき消され、白目を剥いた血まみれの猫に差し替わる。猫の顔は酷くやつれている。まるで印刷し損ねた藁半紙のように。

不規則に明滅する電灯の下に、一台のスポーツカーが止まっている。全面スモークフィルムが張られ、バンパーにも手が加えられている。中の様子は確認できないが、車体が音もなく、大きく不自然に揺れているのが分かる。

まだ呼吸リズムの整わない口元に両手を当て、吐き出す息を嗅ぐ。吐く息の匂いよりも、吐いてる最中に感じる鼻粘膜の刺激から、まだかなりのアルコールが残っているのを自覚する。

すつと突っ立ったまま、春人の視線はいつまでも、自分の住んでいる方向ではなく、よその町の夜景にある。

このちんけで寒々しい夜景を見るために支払った、大きな代償。

ねえ、佳子、本当に俺たちは助かったのだろうか。

春人の膝は寒さ以外の別の何かで、激しく震えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5233u/>

若い夫婦がベッドの中で話すこと

2011年7月3日03時38分発行